西淀病院と医療人をつなぐコミュニケーション誌

# よどコミュ！

創刊号

2015.9

特集 2. 無料低額診療事業で支援

4. このまちの健康発信基地を目指して


CONTENTS


6. JOYS（女医ズ！）　7. 目指すドクター

8. キラリ★西淀人　10. I LOVE Patient　11. シリーズ職場REPORT

特集 広がる医療格差

# 無料低額診療事業で支援

経済的格差が拡大し、貧困が社会問題化する中、大阪府は失業率や生活保護受給率、就学援助率などさまざまな指標で全国ワーストレベルです。西淀病院や淀川勤労者厚生協会の事業所では経済的に困難な方に対して無料または低額で治療が受けられる無料低額診療事業を実施しています。
また、同事業の利用者に生活再建に向けた支援を行っています。経済的理由で医療が受けられない現実、そして無料低額診療で助かった事例について取材しました。

## 生活保護を受けられなくても

今や生活保護受給者が200万人を優に超える時代。その裾野には、更に多くの生活困窮者がいます。

西淀病院が無料低額診療事業を始めたのは４年前。徐々に認知度が高まり、昨年度は187世帯300名以上（のざと診単独の世帯も含む）の方が利用されました。無料低額診療は、医療費の支払いが経済的に困難な方に対して聞き取り調査を行い、病院の定める基準に基づき医療費を低額または無料にする制度です。西淀病院では、１階の医療福祉相談室に在籍しているソーシャルワーカーが相談に応じています。

「無料低額診療が始まって、医療費に困っているのにどの制度でも救済されなかった患者さんのご相談にのることができるようになりました」と言うのは井口ソーシャルワーカー（MSW）。これまで数々の相談を受けてきました。

「生活保護を申請する条件のある方には、そちらを案内します。でも貯蓄が少しあったり持ち家があったりして、すぐには生活保護を受けられない世帯はとても多いのが現状です。65歳以上の世帯に限っていえば、無料低額診療を受けている世帯のうち生活保護基準以下の収入の世帯が67％を占めています」

## 無年金・無保険から新たなスタートを

最も多いのは、65歳以上の方が生計中心者になっている世帯です。無料低額診療を受けている全件数のうちの約半分。そのほとんどは、単身または２人世帯です。２人世帯は夫妻関係が多いですが、中には親子でともに65歳を超えていたり、親の年金で家族を扶養しているケースなどもあります。

たとえば自営業のＡさんの場合。もともと細々と店を経営していたため、年金に加入しないまま65歳を迎えました。店の収入は先細りですが、無年金なのでやめるわけにはいきません。持病が悪化しましたが、経済的理由で通院を中断。無保険状態になっていました。その数年後に自宅で倒れ、救急車で西淀病院に運ばれてきました。

生活保護をすぐに申請するのは条件的に難しく、国保の窓口に保険料の分納相談に行き、国保証を交付してもらった上で無料低額診療を受けてもらいました。

## 権利意識を土台にした地域医療を

医療における駆け込み寺的存在の無料低額診療ですが、課題も数多く残されています。

井口MSWが一番に指摘するのは「薬代」。病気によっては診療代より高額な場合があるにもかかわらず、大阪市では薬局を無料低額診療実施施設として認めていません。全国には市町村独自で助成しているところもあり、今後はそうした要求も訴えていく必要があります。

そして、無料低額診療の認知度を高めること。そのためには「患者さんに関わるすべてのスタッフが、患者さんの抱える困難をキャッチする感度を高めること」が求められます。無料低額診療事業について学ぶ院内学習会は年に１回開いているものの、まだまだ十分とは言えません。

地域との連携も欠かせないテーマです。民生委員、自治会長、ケアマネジャーなど地域の方々に認知していただくことで、制度につながりにくい高齢者にも利用していただける可能性が広がります。

こうした取り組みの意義とやりがいについて、「私たちMSWは社会保障や人権について学び、社会福祉士の国家試験を経てソーシャルワーク支援のプロになります。西淀病院は、身につけた権利意識を最大限発揮し働くことができる病院だと思っています」と井口MSW。

格差社会の是正を国に訴えると同時に、潜在的に埋もれた方達にこの制度をどのようにお知らせしていくか。経済的理由で医療にかかれないことのない地域づくりを目指して、これからも無料低額診療事業に取り組んでいきたいと思います。

### ご利用には

▶無料低額診療の利用には、申請が必要です。
▶無料低額診療の申請時に、担当MSWとの面談を行います。
（収入状況を証明する資料の提供をお願いします。）

| 申請者の世帯の人数 | 1 | 2 | 3 | 4 |
|---|---|---|---|---|
| 月収入のめやす（生活保護基準の150％以下） | 18万円 | 24万円 | 30万円 | 35万円 |

※実際の認定には年齢や貯蓄の状況等で判断が異なります。一度ご相談下さい。
※収入によって一部減免になる場合もあります。

ご相談窓口　医療福祉相談課　病院１階　Tel.06-6472-1141
受付時間：月～金（祝日除く）　9:00 ～ 16:00

医療福祉課長　井口幸子

医療福祉相談室のスタッフ

### わたしたちの 医療福祉宣言

わたしたち医療ソーシャルワーカーは、相談者の医療と福祉を受ける権利を守ります。

相談者の立場で考え、自己決定を尊重した援助を目指します。

そして、福祉の専門職として知識・技術の向上を目指し、相談者の満足度を高めます。

医療福祉相談課

**HPH（Health Promoting Hospitals & Health Services）とは？**

1986年にWHOが定義した「健康増進活動拠点病院」のこと。HPHは、病院とヘルスサービスに関わる人たちの健康状態の改善を目指す組織。HPHが働きかける対象は、患者とその家族（特に弱い立場にある人々のニーズに取り組む）、病院スタッフ、地域住民と環境である。認定された病院では、患者の病気を治すだけでなく、地域の人たちが健康に暮らせるようさまざまな活動を行っている。また病院職員の健康維持にも積極的に取り組み、患者・地域住民・病院関係者の３者について健康増進活動を行っていることが特徴。

# 特集 このまちの健康発信基地を目指して

## ＨＰＨのとりくみ

結城由恵医師に聞く

### 合言葉は「地域まるごと健康づくり」

大阪には急性期の大きな病院はたくさんありますが、地域の人と一緒に健康を考える取り組みはほとんどありません。西淀病院は2014年にHPHに認定され、１年間かけて健康増進活動の大切さを病院内で広げてきました。今年はいよいよ活動を始める年。病気の治療だけでなく地域の健康増進まで図る、大阪で第１号の拠点病院になれればと意気込んでいます。

具体的な活動内容は、さまざまなものが考えられます。たとえば自治体と協力して減塩食を推進していたり、職員が腰痛にならないための研究を大学と共同で行っているところもあります。病院単独ではなく、保健所や区役所、地域包括支援センター、商店街などと協力して取り組むことが大切です。

### 活動を広げるためにはスタッフ養成が鍵

友の会の健康チャレンジなど、これまでも西淀病院では健康に関する活動に取り組んできました。HPHとしては、今後それらをデータ化して活動の成果を示したり、活動をより広く、より継続的に地域に広げていくことが求められます。

その１つとして、これまで家庭医グループの医師たちが小中学校で行ってきた防煙活動を、将来的には診療所などがある他の地域にも広げていきたいと考えています。そうなれば家庭医だけでは対応できなくなるので、講師役となる医師を増やし、学校との連携体制も強化しなければいけません。

また、のざと診療所の３階に運動施設をつくり、地域の人も病院の職員も、ロコモ予防体操やストレッチ体操を定期的にできるようにしたいと思っています。こちらも理学療法士だけでは人数が足りませんので、スタッフを養成したいと考えています。

### 社会的な健康格差をなくしたい

特に生活習慣病の患者さんを診ていると、どうしてそうなってしまったのか、そうならないためにはどうしたらよいかという思いを強く抱きます。糖尿病は軽いうちならば合併症が予防できますし、インシュリンなど高い薬も買わずに済むのです。

たどっていくと、幼少期からの生活習慣や家庭環境にいきつきます。生まれた時の環境によってその人の将来的な健康が決まってしまう、社会的な健康格差が根源にあるのではないかと思います。

60歳で透析しているある患者さんは、父親も高血圧で肥満があり、狭心症で心臓と腹部大動脈瘤でステント治療を行い、最近では認知症になっています。母親も高脂血症と肥満があり、早くに認知症になっています。食生活を聞くと、その家庭ではなんと１年間に60kgも砂糖を消費するそうです。カレーの中にも砂糖を入れて食べる程です。もしこの母親に栄養学の知識が少しでもあれば、今のような深刻な病状にはならずに済んだかもしれません。食に関する十分な教育の機会が得られず、結果的に健康を害している悪循環を断ち切ることが根本的にはとても重要なのです。

### 医療人も含めた地域全体の健康を目指して

HPHの特徴は、病院スタッフの健康増進活動も積極的に行うことです。大阪民医連では、ウオーキングや水泳や禁煙など、エントリーした項目を３ヶ月間やり通したら商品券がもらえるという試みをしています。こうした取り組みを充実させたり、友の会の健康活動を広げたり、各職場で毎日体操をしたりと、できることはたくさんあります。勤務に関するストレスチェックもその１つです。

医療人が健康でイキイキしていることは、患者さんの思いを受け止める上でも非常に大切です。そのためには各スタッフの自己管理に任せるだけでなく、病院として積極的に働きかける必要があると考えています。

そして淀川地域に暮らす人々が、生まれてから亡くなるまで健康に生き続けられるような生活基盤をつくっていきたいというのが私たちの願いです。背景はさまざまでも、誰もが自分らしい生き方を全うできるように。西淀病院のHPH活動がそのきっかけとなり、地域全体が健康で幸せになっていけば…と大きな夢を描いています。

# JOYSI 女医ズ★

日本一女性医師が働きやすい病院を目指して

女性医師に聞く！

2007年琉球大学医学部卒業。
常勤医を務めながら２児の母としても子育て奮闘中。

家庭医療専門医
野口　愛さん

## 授乳しながら続けた初期研修

医師になって１年目に１人目、６年目に２人目を出産しました。１人目の時は初期研修中だったので、産後８週で復帰しました。１人目は満足のいく子育てはできず、研修医としてただただ走り続けていました!!

３年目に大阪の家庭医療センターに移り、実家が近くなって両親のサポートを受けられるようになりました。同級生たちには「フルタイムで子育てするなんてすごいね」と言われますが、両親の助けと夫の理解があることは本当に大きいです。まだまだ子育てしながら働いている医師は少ないのが現実ですね。

## 子育て医師の勤務制度を設立

本格復帰して１ヶ月後に、乳腺炎で３週間も休んでしまいました。医師であれば子育て中でも無理して頑張ってきた歴史が淀協にはあります。でも自分がつぶれてしまっては意味がない。できないことはできないと言わなきゃいけないと気づきました。そこで今年「育児支援医師枠」という細則を先輩の女医の先生方や医局事務課長と協力してつくり、５時になったらキッパリ「お疲れ様」と言って帰れるようにしました。医師拘束手当てを外す給与体系とし、正月やGWの長期休暇以外は基本休日出勤は免除。勤務表にも「育児医師制度利用中」と記し、職員全体に制度として認識してもらうことを目指しました。

医師が規則正しい生活をし、家族と食事をし、子どもと良い関係を保てるようにすること。それは女医だけでなく男性医師も同じです。患者さんを元気にするのが役目ですから、まずは自分自身が心身ともに健康でなければと実感しています。

## 休み中でも情報交流できる場をつくりたい

育休中の女医にとって「勉強できない」ことのストレス、「おいていかれるのではないか」という不安。空いた時間に勉強しようと思っても、30分を確保することさえ難しい…。そこで先輩に相談すると、「5分の細切れを10回つくるなど工夫したら」とアドバイスされました。読みたい文献は枕元に置いておくなど、工夫できることはいろいろあるのです。

私がこれからやりたいことは、育児休暇で休んでいても仲間だと認識し合えるような交流システムをつくることです。「産前産後、育児休暇中なのでしっかり休みなさい」と言うだけではなく、情報を伝え、疎外感をなくすこと。そうしたつながりを持つことで、復帰しやすくなるのはもちろん、育児勤務への理解も深まっていけばと思います。

落合甲太
11年目総合内科医

×

蓮間英希
3年目後期研修1年目

# no:01 Doctor 目指すドクター

医師像に近づく！

思いと現実の差のなかで奮闘中。医学生時代から現在まで、描いていた医師としてのありようや変化のきっかけなどを“医師像”をテーマに聞いてみました。

**学生時代や初期研修医時代に目指していた医師像とはどのような医師でしたか？**

**落合：**医学生時代は研究に興味を抱いていましたが、民医連との出会いで臨床医を目指しました。患者さんのもっている問題をすべて受け止められ、背景まで見て、寄り添える医師になりたいと思うようになりました。

患者さんの背景まで見て対応していくためには、他のスタッフとチームとして取り組まなければいけないこと、病院として取り組まなければならないことがたくさんあることもわかってきました。今の医療制度の谷間に落ちこむ人たちが本当にたくさんいます。

自分の出来ることを行うということだけでなく、その人が必要としていることに取り組める医師になりたいという思いから、どのようなことが出来るのかを学び直すようになりました。

神戸大学の総合診療部に外部研修に行ったことも貴重な経験でした。医学的にどこまで対応できるのか、自分なりにつきつめられる良い学びの機会となりました。

**蓮間：**私は今も昔も家庭医を目指しています。その原点が“パッチアダムス※”という映画です。病気だけでなく、患者さんそのものを診て、その人の不安を取り除いていって、そのことにより私自身も幸せになりたいと思っています。そのためには、患者さんの背景とかに関わっていける家庭医になりたいと思っています。

※実在した医師の感動ドラマ。“ユーモアによる治療が重要”という説を実践し、医学界の常識を覆した医学生パッチ・アダムスの半生を描いた秀作

**今、改めて先生の目指す医師像をお聞かせください。**

**蓮間：**はじめのうちは、なにが診られてなにが診られないのかすらわかりませんでしたが、家庭医としての役割が果たせるように少しずつ近づいてこれているのかなと思います。

今は初期研修医の副指導医として関わっていますので、コモンディジーズのマネジメントをしっかり出来る、スタンダードな医療が出来ること、さらに教えられるようになりたいと思っています。最終的には、診療所を担える家庭医になれるように、緩和とか皮膚科とか精神科とかも勉強していきたいと思っています。また、ノンテクニカルスキルも意識しています。私も楽しく仕事をしたいですし、まわりにも楽しく仕事をしてほしいと思っています。でも、言わなければいけないことはあるので、どのように伝えれば良いのか言葉の表現やトーンは注意しています。医師だけで医療を行っているわけでなないので、他職種へのリスペクトはもっています。

**落合：**研修医を育てる医学教育、初期研修に関わってきました。続けていきたいと思っています。また、受診できない人たちの中に、医療が必要な人がたくさんいます。健康づくり、病気にならないような環境づくりが大切だと思い、ボランティアや健康友の会に関わっています。この関わりは大切にしていきたいと思っています。病気にならない健康づくりという考えを理論づけたものがHPHで、健康の度合いは、生い立ちや健康に関する教育や知識の量と密接に関わりがあることがわかってきています。西淀病院が行っている地域の健康づくり、開業医の先生方や学校と連携していくこと、小中学生対象の喫煙防止教室や無料塾など素晴らしい取り組みに私も参加していきたいと思っています。

学生時代にもっていた青臭い理想の医師像が、少し現実味を帯びてきているというのが今の段階だと感じているところです。

# キラリ西淀人 vol.01

## 大島 民旗（たみき）

西淀病院　院長

第１回のキラリ☆西淀人は、大島民旗西淀病院院長。
このコーナーは、西淀病院に関わる人たちの中からさまざまな角度で語ってもらう予定です。今回は、院長から創刊号への抱負です。

## 【 発刊にあたって 】

### 病院をとりまく環境

この広報誌は、西淀病院（淀協）に何らかのかかわりのある（あった）主に医療職の方への情報誌です。西淀病院は218床の地域密着型中小規模病院です。民医連（全日本民主医療機関連合会）という団体に所属しています。

医療において「専門性」と「総合性」のバランスは、常に問題となります。当院も2009年に病院リニューアルを行うまでは258床の病床数を有し、ICU機能、緊急外科手術、循環器のインターベンション機能を持っていました。しかし、大阪市の西淀川区という大都市部における医療展開という場合、周囲に500床規模の大規模急性期病院が林立している状況の中、当院が地域住民から求められている役割は別のところにあると考えました。私が院長に就任してから、他の大規模DPC病院の院長先生と情報交換を行う中で、診断がついて重症集中治療を行う医療機関は、特殊な時期（学会で担当医師がいないなど）を除いては、そう受け入れの場に困ることはないのです。

### さまざまな患者さん

今日の超高齢社会・貧困格差の中で発生する頻度が高いのは、①症状はあるが原因疾患が特定できない状態…例えば原因不明の意識障害やフォーカス不明の発熱など、の患者さんの診断と治療、②濃厚重症集中管理を行わず、過度な侵襲を加えない範囲で可能な限りの治療を行う患者さんのマネジメント、③路上生活者や認知症虚弱高齢者、身寄りのない方など、急性期治療後の生活の場の調整能力が必要な患者のマネジメント、④身体的疾患だけでなく不安障害、うつ、認知症など精神的疾患も併せ持った患者さんの対応、だと実感しています。

### 保障されていない「当たり前」のこと

人は生まれながらにして平等、健康な生活を営む権利は日本国憲法で保障されています。ところが地域には、風呂にはいるとかバランスの良い食事をするとかいった本来全ての人に保障されるはずの「当たり前のこと」ができていない方々がたくさんいらっしゃいます。こうした方に必要な医療を提供する臨床能力は本来ならすべての医療者に求められるものですが、残念ながら医師では大学を中心とした医学生生活の中で、そのようなトレーニングを受ける機会は極めて限定的なままです。そのため多くの医療機関がこうした患者さんの対応には二の足を踏む状況があり、特に当院の置かれているような大都市地域では「盲点」になりがちです。

### 地域の健康づくりへ

また、これも医学の発展の歴史上必然ではあるのですが、壊れた身体の修理（治療）には多くの資源が投入されますが、その前の壊れない身体にするためのメンテナンス（予防）には十分関心が払われてこなかったと言えます。今後より重要性を増すのは病気にならない生活を保障するための「健康な地域づくり」と考えます。

そのため私たちは、地域においてこうした困難を抱えた患者さんのニーズに対応するための「総合的診療能力」を、医師を含めた医療・福祉・介護のチームの中で創り上げていきたいと考えています。西淀病院を何らかの形で「くぐった」方は、私たちと一緒にそうした役割をになっていただけるパートナーと考えています。

西淀病院の現在の姿を知っていただき、さまざまな励まし、ご意見をいただきたく、この広報誌をこれから発行していく所存です。どうぞよろしくお願いします。

I Love Patient
Vol.01

# 家族の味方になってくれる看護師にあこがれて

## 患者さんのパートナーとして

看護師　武田貴子

### 救急外来から見える社会の厳しさ

寒さの厳しい２月の朝、路上で倒れていた93歳の男性が救急外来に運ばれてきました。悪臭を放つ衣服に生活用具の入ったビニール袋。病院数の多い大阪において、19件目にしてようやく当院に受け入れられたと救急隊員は言います。難聴のため会話も上手くできない状態で、「なかなか死なれへんな…」とつぶやいた時には切なさでいっぱいになりました。

夜間に運ばれてきたお母さんは、精神安定剤の多量服用で意識がない状態でした。一緒に来た５歳の男の子が、お母さんが飲んだという薬の袋を握りしめていました。「お家にまだあるの？」と聞くと、あるとのこと。家が近かったため、私は男の子の手を取って一緒に走りました。その間、男の子は私の手をぎゅっと握りしめて離しません。「大丈夫やからな。お母さん絶対に助けるからな」と泣きながら上った文化住宅の古い階段が、今もはっきりと記憶に残っています。

### 身内のない子どもの生活を地域で支える

社会の厳しさが垣間見られる西淀病院で、私はいつも「家族の存在」を想います。それは私が小さい頃、病弱だった母親の付き添いの中で看護師に触れ、憧れるようになったからです。自分もいつか、患者さんだけでなく家族の気持ちも支えられる看護師になりたい。そんな思いで30年間勤めてきました。

急性期病棟に勤務していた時のこと。アルコール依存症による腎不全で、50歳代の男性が意識不明で入院してきました。父子家庭で、小学６年生と中学１年生の子どもたちの生活をどう支えるかが、男性の療養のためにも重要な課題となりました。

協力を呼びかけたのは、小中学校の先生、市役所の生活相談員、町会長、婦人部長、民生委員など地域の方々で、合同カンファレンスを開きました。そこで公的な里親制度を利用すること、里親が見つかるまでは町会長さんと婦人部長さんが１人ずつ面倒をみてくださることが決まったのです。

### 患者さんが元気になるまでのパートナー

しかし一件落着に見えた矢先、意識を取り戻した父親が頑固な性格を炸裂させました。地域の人たちには感謝しつつも、「学校など行かずに俺の傍にいろ」と子どもたちを縛り、看護師には暴言を吐いて治療拒否する始末。私は何度も彼の想いに耳を傾け、時には抑えきれない反論をし、ぶつけて泣きながら喧嘩しました。最終的には治療に専念し、自宅療養できるほどに回復。そして数か月が経った夏の日、子ども２人がお中元を持って病棟を訪ねてきたのです。お父さんからの「療養をがんばっている」という伝言とともに。

改めて、看護師の役割とは何かを考えます。患者さんのパートナーとして、手探りしながら、あきらめずに関わっていきたい。そこから良い変化が生まれることほど、嬉しいことはありません。



# シリーズ職場REPORT

## 第1回　リハビリテーション科

"若手が多くにぎやかな職場です！"

## 子育て中でも いきいき活躍

20代が約半数で、子育て中のスタッフも多く、女性が仕事と家庭を両立しやすいことが職場の自慢です。地域の患者さんにとっても、同じスタッフが長く働いているのは安心と好評をいただいています。フレッシュな新人からベテランまで、とにかく元気なリハビリテーション科。スタッフがいきいきと働ける環境が患者さんの回復にも良い効果を生むことを信じて。

## 地域での生活を支えたい

医療や介護を一体的に受けられる地域包括ケアの時代。たとえ病気で入院しても、できるだけ早くその人らしい生活に戻れるようサポートしたいと、全てのスタッフは願っています。

そのためには多職種としっかりコミュニケーションをとること。患者さん一人ひとりの生活環境を考え、必要なリハビリに一緒に取り組みたいと思います。

## 求められる呼吸器専門のリハビリ

西淀川区は、呼吸器疾患の患者さんが比較的多い地域です。ひと昔前は工場からの排煙等が原因でしたが、今は大型トラック等から出る排気ガスが主な要因です。

そこで呼吸療法認定士の資格を取り、慢性閉塞性肺疾患の患者さんのための呼吸リハビリ教室に活かそうというスタッフも増えています。院内の呼吸器グループにも積極的に関わり、定期的に多職種と一緒に勉強会も開いています。

## プラス思考で思いを聴く

リハビリが必要なのは主に回復期リハビリテーション病棟、地域包括ケア病棟、急性期病棟の患者さんですが、中にはリハビリに行きたいくないという人もいます。そんな時は無理強いせず、まずは気持ちをじっくり聴くように心がけています。リハビリ中も、“できない”ことに着目するより“できる”ことを増やしたり活かしたりするよう意識しています。プラス思考が基本です。

よどコミュ！
西淀病院広報誌「よどコミュ」
創刊号　2015年9月1日発行

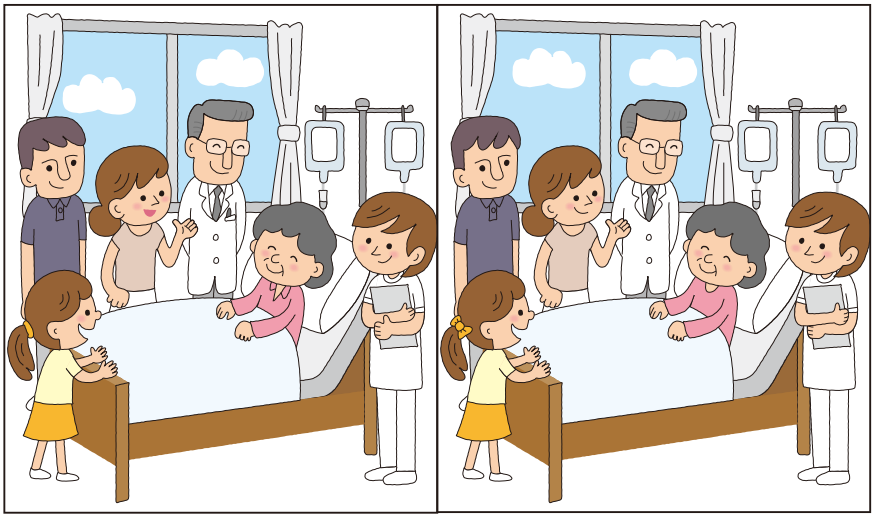
# クイズ

**7つのまちがいさがし**

**正解者の中から抽選で5名に図書カードを進呈します。**
（但し医師・看護師及び医系学生の方に限ります）

**締切日：11月末到着分**

はがき又はE-mailで答えを送ってください。
・クイズの答え
・氏名・職種・職場名又は学校名
・住所・電話番号・E-mail
E-mail：yodocom@yodokyo.or.jp
郵送：〒555-0024 大阪市西淀川区野里3-5-22
西淀病院 クイズ係　宛



**研修医・医師・看護師募集中！**

病院見学・実習随時可能。お問い合わせください。

一般財団法人 淀川勤労者厚生協会 **西淀病院**
〒555-0024 大阪市西淀川区野里3-5-22
TEL：**06-6472-1141**（代表）
医師／看護師採用担当までご連絡ください。

## 編集後記

ようやく、西淀病院の広報誌「よどコミュ」創刊号を発刊することができました。この広報誌を通じて、西淀病院と医療関係者の〝こころを通わせあう〟交流をしていきたいと考えています。西淀病院は今から68年前、戦後の貧困、飢餓と混乱の中、〝すべての人に平等の医療を〟の願いをもとに進歩的な医療従事者と地域の人びとの運動で誕生しました。まだ、国民皆保険制度がない時代でした。〝当時のサンデー毎日が「〝病院をわれらの手で〟労働者、地域住民が自らの手で病院を建設」と紹介しています。西淀病院は〝無差別・平等の医療と福祉の実現〟をめざす民医連（MIN-IREN）に加盟する病院です。2万世帯の健康友の会があり、力を合わせて地域丸ごと健康づくりに取り組んでいます。218床の病室は一切差額ベッド代を頂いていません。いま、経済的理由による手遅れ死亡事例が後を絶ちません。昨年、西淀病院でも2件の事例がありました。私たちはそんな時代にあって、〝いのちの灯台〟といわれるような病院をめざしています。地域の健康増進支援病院（HPH）の活動もその一端です。〝いのちの平等〟それは病院の理念であるとともに、医師をはじめすべての職員の願いです。私たちの日頃の想いやとりくみをこの広報誌を通じて発信していきます。**よろしく。〝よどコミュ〟！**

（淀川勤労者厚生協会副理事長　長瀬文雄）

## 淀川勤労者厚生協会西淀病院

救急病院　基幹型臨床研修指定病院

大阪市西淀川区野里3-5-22　TEL：06-6472-1141

**診療科目**
内科（呼吸器、循環器、消化器、神経、糖尿病医）
外科・整形外科・婦人科・泌尿器科・放射線科・
小児科・リハビリテーション科・血液浄化室（人工透析）

**総ベッド数：218床**
一般病棟：110床
地域包括ケア病棟：54床
血液浄化室（人工透析）：25床

表紙：初期研修医　江間 翠さん　西淀病院初期研修医の江間翠です。西淀病院は医師もメディカルスタッフも皆一緒になって患者さんのことを考えていけるアットホームな病院です。ぜひ西淀病院にいらしてください！

一般財団法人 淀川勤労者厚生協会　西淀病院　〒555-0024 大阪市西淀川区野里3-5-22　TEL 06-6472-1141　URL www.yodokyo.or.jp/nishiyodo